

# 堀河百首題「鷹狩」をめぐつて(2)

内藤 愛子

『堀河百首』冬部の歌題鷹狩の詠歌は、具体的な鷹の種類が和歌の素材とされていることが特徴の一つとして、既に指摘されている。この問題について再び論じてみたい。

確かに、「鷹狩」の十六首のうち、鷹が詠まれていない歌は四首(1059・1060・1064・1071)にすぎず、十二首は単に鷹と詠じる歌と具体的に白斑の鷹、真白の鷹、はし鷹というように、鷹の種類に拠った歌である。鷹は四首(1058・1065・1067・1068)、白斑の鷹は五首(1057・1061・1062・1066・1070)、はし鷹は二首(1069・1072)、真白の鷹は一首(1063)である。

これらの鷹の種類が『堀河百首』成立以前の鷹狩の詠歌に素材としてどのように詠まれているかを具体的にみてみよう。

まず、真白の鷹を取り上げてみよう。真白の鷹は、『万葉集』4179と、『古今六帖』の「おおかか」に一首(1173)みえ、管見の範囲では歌例が少なく二首とも鷹狩の詠歌である。

4179 矢形尾の真白の鷹をやとに据え掻き撫て見つつ飼はくしよしも  
1173 やかたをのましろ鷹をひきすゑて君かみゆきにあはせつるかな

また、屏風歌では『輔尹集』48(『私家集大成』中古I 120)に  
前入道大政大臣たいかうの屏風に、りんし客かかきたる所に  
48 とやかへるましろのたかをひきすへてきみかみかり(以下欠)  
とあり、この歌は『後葉集』44で五句目を補足したならば、『古今六帖』1173の歌と初句と四句目の「みかり」と「みゆき」の相違だけであることから、同歌として捉えることもできるであろう。  
永保三年十月斎宮媞子内親王歌合(『平安朝歌合大成』5)214の鷹狩の歌題に

12 御狩野に雉子たつなりあはせやる真白の鷹の鈴もゆるるに  
とあり、管見の範囲で『堀河百首』成立以前の歌合で真白の鷹を詠じたのはこの一首だけである。

『堀河百首』において、真白の鷹を詠じた歌は藤原仲実の次の一首(1063)である。

1063 やかた尾の真白の鷹を引きすゑてうだのとだちを狩りくらしつ  
る

この詠歌は、前掲の歌(117)の上三句を踏えて一首を構成し、しかも、『千載集』42の冬部の鷹狩の歌として入集されている。

このように、「真白の鷹」は、『堀河百首』成立以前において歌例は少ないが、『堀河百首』詠出歌人の詠歌には、『散木奇歌集』1512(『私家集大成』中古II 62)や『江師集』140(『私家集大成』中古II 51)に散見できる。

1512(前略) あはれむかしは こたくちを つかさとりしも のきはうつ ましろの鷹の そりはてて(後略)

140雪ふかきうたのゝみつの草かれにましろの鷹をあはせてそゆくこの二首のうち、1512の俊頼の歌は不遇の訴嘆の長歌である。匡房の歌(140)は、詞書に「鷹狩 つくしにて」とあり、鷹狩詠で、しかも歌の中に「うだ野」という「記紀」や「万葉集」を典拠とした新奇な歌枕、地名であり、それは狩猟地として有名な場所である。

殊に、140の歌は記紀万葉歌に典拠を求めた「うだ野」や歌例の少ない真白の鷹が前掲の藤原仲実の鷹狩詠歌(1063)と共通することから、この二首はなんらかの相互の影響関係が想定できるであろう。

また、『永久四年百首和歌』の冬季の歌題である「野御幸」において、「真白の鷹」を詠じた源兼昌の歌が一首(355)ある。

355あはせつるましろの鷹も心あらば御こしちかくて空にとらなむそれは、天皇の鷹狩が詠じられ、『古今六帖』1173の歌を発想の基としている。源兼昌は、国信家のメンバーの一人で、『堀河百首』詠出歌人達との交流関係が認められることから、真白の鷹は、『堀河百首』詠出歌人に関係するグループにおいて詠まれていたことが看取できる。

このように、真白の鷹は、先行歌例が少なく、『万葉集』の鷹狩

歌にみられる和歌素材であり、それは『堀河百首』詠出歌人やその歌人達と交流のある周辺の歌人に拠って鷹狩詠の素材として詠じられている。真白の鷹は『堀河百首』詠出時期に一般化され、その後百首歌や歌合の鷹狩の題詠歌の素材とされ、定着化していく傾向が見受けられる。

次に、白斑の鷹は真白の鷹と同様に『万葉集』にみられる和歌素材である。『堀河百首』成立以前の勅撰集において白斑の鷹は『後拾遺集』393に障子絵の歌一首が挙げられる。

393とやかへるしらふの鷹の木居をなみ雪けの空にあはせつるかな白斑の鷹は、『万葉集』1178の「白き大鷹を詠む」という家持の長歌を典拠とした和歌素材と思われる。

『堀河百首』の詠出時代以前の白斑の鷹を詠じた歌例は少ないが、『堀河百首』において白斑の鷹は、十六首中一番多く、注目された鷹の種類の和歌素材である。また、次掲の歌は、いずれも万葉の鷹狩詠にみられるように鷹の縁語を用いる表現方法に拠っている。

1057狩くらし上毛の雪もはらはねばしらふのたかと人やみらるむ  
1061しらぬりの鈴もゆららにいはせ野にあはせてぞみるましろふの鷹

1062ふる雪に友むれ鳥しるべにておけどもみえずましろふのたか  
1066やかたをのしらふの鷹を引すゑとだちの原を狩くらしつる  
1070雪ふりにしらふの鷹をあはせては鈴の音こそしるべなりけれども、  
また、『堀河百首』の詠出歌人達が参加している『永久四年百首』の「野行幸」に白斑の鷹を詠じているのは次掲の二首である。

351御狩野の草の尾花なびくまでは風はげしきましろふのたか  
356ふかき野への御幸のけふしもあれしらふのたかをすゑてけるか

な

351の五句目は、諸本に拠つてましろふの鷹、ましろへの鷹等が見られる。<sup>(3)</sup>この二首は鷹の縁語に拠る伝統的な表現方法の歌である。

また、隆源の『隆源口伝』（『日本歌学大系』第一巻）では、みちのくのしらふの鷹の手にすゑてあさちのぬしのこれやこのこゐ

しらふの鷹とは尾に白きことあるなりとあり、白斑の鷹の解説がなされている。

このように、白斑の鷹は『万葉集』にみられる和歌素材であり、先行歌例は管見の範囲では『後拾遺集』の一首（393）である。白斑の鷹は『堀河百首』詠出歌人達にはかなり注目された素材であり、時代的には新しい素材と言えよう。その後の百首歌や歌合の「鷹狩」の和歌素材として白斑の鷹の定着化の傾向が見える。

次に、はし鷹について述べてみよう。はし鷹は、小形の鷹でハイタカと呼ばれ、小鷹狩に使用されていたタカ類である。『古今六帖』において、「こたか」に分類された四首のうち、三首（1178・1179・1180）がはし鷹を詠じた歌である。

1178 かりしてのほどなき身にもはし鷹のねはなきはふものにざりける

1179 つらしとも怨みざらなんはしたかのとがへる山のしひももみぢす（後撰集・雑三・117）<sup>(4)</sup>

1180 かりにてもすゑじとぞおもふはしたかのすずなるなをたちもこそすれ

これらは、狩に飯を掛け、かりそめの恋のイメージを暗示する歌である。また、『古今六帖』において、はし鷹は小鷹という認識を

基に分類されていることが知られる。だが、「小鷹狩」という分類には、はし鷹を詠じた歌が見られず、秋季の素材と共に狩が詠まれ鷹狩の季節に拠つた分類と捉えられる。はし鷹は鷹狩の和歌素材としてよりも人事詠の素材として詠じていたことが知られる。

『堀河百首』成立以前の勅撰集において、はし鷹が詠じられた歌は『後撰集』1171（雑二）1215（雑三）、『拾遺集』410（物名）1230（雑恋）、『後拾遺集』267（秋上）の五首が挙げられ、そのうち『後拾遺集』267の一首のみ四季詠歌として配されている。

1171 忘るとは怨みざらなんはし鷹のとかへる山の椎はもみぢす  
1215 わがためにおきにくかりしはし鷹の人の手に有りときくはまことか

1230 はしたかのとがへる山のしひしばのはがへはすともきみはかへせじ

267とやかへりわが手ならしはし鷹のくるときこゆるすず虫の声『後撰集』1171・1215、『拾遺集』1230は、いずれも『古今六帖』と同様に恋愛的内容を盛り込んだ詠歌である。そして、はし鷹は、『後撰集』の頃から素材とされ、それらは、恋歌の情趣を持った詠歌の和歌素材であることが知られる。

また、屏風歌において、はし鷹を詠じた鷹狩の歌は次掲のとおりである。

十月、山里にかりする人来たり

234 山里に心あはする人ありと我はしたかにくはりてとふ（源順集『私家集大成』中古195）

はるのくに、たかよりする人、はなをみてゆく  
かりにゆくわれはしたかはすゑなからはなにこゝろをそらしつ

る哉（惠慶集『私家集大成』中古Ⅰ104）

冬、おほかそでにすゑて、おる人あり

164 しもかれの山のにしきもおとろかしわかはしたかを取りしかはねは（同集）

九月、こたかがりしたる人やとりたり

171 たひ人のやとりにやとやかりてまし日もはしたかにかりくれぬめり（元輔集『私家集大成』中古Ⅰ113）

山さとのいへに、たかすへたる人まうできて、かにとたちて

はへるに、女ともあまたはへり、きくのはなうつろへり

209 はしたかをてにひきすへて山さとにやとかりにとそわれはきにける（能宣集『私家集大成』中古Ⅰ119）

西山秀人氏のご論考に拠れば、鶴が鷹狩の屏風歌に詠じたのは、河原院グループの歌人である順・惠慶・元輔・能宣に限定され、初期定数歌詠の次掲の影響に拠って当代の屏風歌の表現的変容を想定しうるのはないかと指摘されている。<sup>65</sup>

35 多こひする君かはしたか霜かれの野になはなちそはやく手にす

ゑ（源順集『私家集大成』中古Ⅰ95）

279 はしたかのとかへる山のしひのえのときはにかれぬ中とたのま

む（惠慶集『私家集大成』中古Ⅰ104）

ご論考を基に、『源順集』天地の歌の冬部の一首（35）と『惠慶集』百首の歌（279）は鷹狩にはし鷹詠を試みたかなり初期の歌であると言えるだろう。殊に、天地の歌（35）が、冬部の鷹狩詠に小鷹であるはし鷹を用いているのは、初期百首に顯著である和歌の素材の季節設定を変える試みの一つとして捉えることも可能であろう。<sup>66</sup>

このように、はし鷹は『後撰集』選集の頃より和歌素材とされ、

鷹狩の屏風歌の料歌になり、恋愛的内容の歌例が多くみられる。しかも、はし鷹が冬の素材として定着するに当って少なからず順の鷹狩詠の影響と捉えられるであろう。

次に、歌合において鷹狩が冬の歌題として初出である長暦二年晩冬権大納言師房歌合（『平安朝歌合大成3』125）に

17 箸鷹のとふ尾の鈴の音すなり野辺の雉子は立つ空もあらし

とあり、この歌は『順百首』（『私家集大成』中古Ⅰ115）の鷹狩歌（516）の影響に拠って雉子が詠まれていると言えるだろう。<sup>66</sup>

『堀河百首』の鷹狩の歌題において、はし鷹が詠まれた歌は次掲の二首（1069・1072）である。

1069 ふる雪に行へもみえず著たかのをぶさのすずの音ばかりして

1072 はしたかのしるしの鈴のちかづけばかくれかねてや雉子鳴くらん

だが、『堀河百首』において、はし鷹は、歌題「鷹狩」の他に、恋部の歌題「片思」の肥後の歌（126）に

126 心をもあはせぬ人をはし鷹のなどやすずろに恋ひわたらん

とあり、この歌は鷹の縁語、掛詞「あはす」や鈴から「すずろ」を導くなど先蹤の鷹狩詠の発想、技巧、表現を踏襲している。はし鷹は恋愛歌の素材とされている。

また、はし鷹を『堀河百首』詠出歌人達の詠歌には「六条修理大

夫集」140（『私家集大成』中古Ⅱ59）、「散木奇歌集」611・1117・1450、「江師集」122、「一宮紀伊集」32（『私家集大成』中古Ⅱ54）、「基俊

集」34（『私家集大成』中古Ⅱ69）と数多く散見される。

人人つれつれかりて、恋の歌よみしに

140 あし引の山かへりなるはし鷹のさも見えかたき恋もするかな

人／＼十首歌よみけるに、たかかりをよめる

611 はしたかをとりかふさはにかけみれば我身もともにとやかへせり  
〔金葉集〕282)

よへともかへらす、といへる事を

1117 みかり野にかさなかれするはしたかのこゑにもつかぬうらみを  
そする

恨躬恥運雑歌百首

1450 立いつればひちつかれつゝはしたかのすゝろはしきは我身也けり

みまさかにて、ふかきやまのあられ

122 はしたかのしらふにいろやまかふらんとかへるやまにあられふるなり  
〔金葉集〕276)

おもふことありて、やまさとにすむころ

32 はしたかのすゝろにかゝるすまひとてのへのきゝすとねをのみそなく

雪

34 はしたかのいつれかこひの枝ならんかへるはかりによひみてしかな

これらは、いずれも鷹の縁語に拠る詠法で伝統的な修辭技巧が看取される。しかも、それらの詞書から、明らかかなように鷹狩詠は一首(611)で残り、**「雪」「深き山の藪」**という季節歌や恋愛歌、恨歌、不遇訴嘆の歌等の人事的な詠歌であり、多岐な詠歌内容にはし鷹が用いられている。このように、**『堀河百首』**詠出歌人達にとつて、はし鷹は単なる鷹狩の和歌素材としてではなく、人事的な情趣を詠出する素材として捉えられている。

はし鷹は、『後撰集』の頃より恋愛的内容とした歌に多くみられ、その後も鷹狩の素材よりも人事詠の和歌素材として定着化すると共に詠歌内容の拡大がなされている。

このように、『堀河百首』の「鷹狩」において、真白の鷹、白斑の鷹、はし鷹という鷹の種類を詠み入れることは、鷹狩や鷹のイメージが拡がり、新たな技法や表現方法の工夫がなされている。

殊に、真白の鷹や白斑の鷹は『万葉集』にみられ、『堀河百首』成立以前に歌例が少ないことから古歌に素材を求めたものと思われる。これらは、『堀河百首』詠出歌人達の新しい詠法の試みの一つと考えられるのではなからうか。

注

(1) 拙稿「堀河百首題「鷹狩」をめぐって」(『文教大学女子短期大学部紀要』第39集 平6)

(2) 『後葉集』442(『新編国家大観』)の詞書は「入道前大政大臣大饗し待りける屏風に、野行幸かきたるところに」とある。

(3) 橋本不美男・滝沢貞夫著「校本永久四年百首和歌とその研究」(笠間書院)

(4) 『後葉集』1171の初句は「わするとは」とする。

(5) 西山秀人「後撰集時代の屏風歌——貫之歌風の継承と新表現の開拓——」(『和歌文学論集5』平7 風間書房)

(6) 金子英世「源順百首」の特質と初期百首の展開」(『三田国文』第19号、平5・12)

(7) 前掲(6)に同じ。

本文に引用した『万葉集』『古今六帖』『永久百首』勅撰集は『新編国歌大観』に拠るが表記については改めたところがある。